

学部長

interview



大阪市立大学文学部の魅力や求めて
いる人物像について、またこの文学
部案内を読んでいるみなさまへの
メッセージを学部長の小田中先生に
お話をいただきました。

大阪市立大学文学部長
言語文化学科 表現文化コース教授
小田中 章浩 先生

ー先生にとつて市大文学部の魅力
とはなんでしょうか。

小田中先生（以下、小）一言でいうと「多様性」ということです。文学部には文学作品を研究する分野だけではなく、歴史学もあり、社会学とか心理学、教育学、地理学など、非常に多様な分野があります。要するに人間学ということです。しかも先生方がお互いに仲がよくて、交流がある。そういうところが最大の魅力なんじゃないかと思います。

ー先生自身がそのようなことを実感するときはありますか。

小・ちょっとあります。「この先生はこんなおもしろいことやつてるんだ」とか。異なる分野の先生方との対話へ常に開かれているところが、文学部の魅力だと思います。大研究を掘り下げていくことも必要なことです。ですから、みなさんすごく深い専門性をお持ちです。加えて、常にそれを超えて対話をしていく、そこで何か新しいものが生まれないかという姿勢を、どの先生もお持ちです。そこが、やはり一番おもしろいところだと思います。

ー学生と先生の距離もすごく近いですね。

小・非常に近いです。ここまで学生と教員の距離が近いところは、そうないと思いますよ。私立大学ではものすごく遠いです。また、国立大学よりも、もっとアットホームな感じです。本学内でも特に文学部では、学生と先生の距離が近いです。

ー市大文学部つていいろんなコース
がありますよね。コース分属が2回
生からですが、それにはどんなメリッ
トがありますか。

小・そうですね。高校時代に外から

市文 History

1949年	法文学部文学科創設 (文学部の前身)
1953年	文学部創設
1954年	修士課程設置
1955年	博士課程設置
1968年	5学科 12専攻
1999年	3学科 15コースに改編
2002年	文部省に「21世紀COEプログラム」に採択される
2010年	3学科 13コース 2領域(文学部) 4専攻 15専修(文学研究科)に改編

見る大学と、入つてから見る大学は、やはり違うと思うんです。だから、心理学はこういふものだと、地理学はこういふものだと、地図のりがどのようなものであつたのか、人間とは何者であるのか、を理解することなしには、私たち自身の未来の明確なイメージを描くことは、決してできないでしょう。

から見て、大学は、やはり違うと思うんです。だから、心理学はこういふものだと、地理学はこういふものだと、地図のりがどのようなものであつたのか、人間とは何者であるのか、を理解することなしには、私たち自身の未来の明確なイメージを描くことは、決してできないでしょう。

学科紹介

哲学歴史学科

新しい世紀を迎えて、従来の文化的・社会的伝統の克服が求められていまます。しかし、私たち人間が歩んできた道のりがどのようなものであつたのか、人間とは何者であるのか、を理解することなしには、私たち自身の未来の明確なイメージを描くことは、決してできないでしょう。

哲学歴史学科では、このような人間のアイデンティティにかかる根本的な問題について、共に考えてゆくことをめざしています。

人間行動学科

情報化や国際化によって変化していく時代で、人間行動学科では、観察・調査・実験といった科学的方法にもとづいて、人間の行動・社会・環境・そして両者のかかわりについて、さまざまな角度から明らかにしています。各コースそれぞれの学問分野を中心としたながらも、それらを有機的に結びつけた独自のカリキュラムを提供することでの、「人」とその「環境」の複雑さをさまざまな視点から理解できる人材の育成をめざしています。

言語文化学科

言語文化学科は、言語を通して人間にアプローチし、人間を作り上げた文化を探求します。わが国、アジア地域、欧米諸地域の文学や、思想関係の文献を読み、言語の姿や仕組みを考察します。また言語と関係する文化、たとえば演劇・音楽・映画なども分析の対象となります。物事に興味を持つたり、深く勉強していく出発点はやはりそれいろいろな人とも付き合ってほしいし、いろいろなことを学んでほしいと思っています。物事に興味を持つたり、深く勉強していく出発点はやはりそれに対する「愛」だと思います。だからそれを大切にしてほしいですね。

ーありがとうございました。

小・ありがとうございます。高校時代に外から

いろいろなことは「愛」の始まりであり、最初に言つた「多様性」につながるんですね。文学部は、学問分野が多様なだけじゃなくて、いろんな学生がいるという意味でも多様なんですよ。そこがおもしろいんじゃないですか。

ーありがとうございます。だから

がこれまで何を考えてきたか、現在何を考えているのか、そして今後どのように新しい考え方を打ち出すのかを探ります。